



# 豊岡盆地とアメノヒボコ伝説

## 豊岡盆地はこんなところ

- 土地の約8割が山地 残りの約2割が平地  
平地の半分以上が農地として活用
- 気候は日本海型気候  
夏は気温の高い日が多く冬は曇りや雪の日が多い
- 2005年にコウノトリが野生復帰を果たす  
現在では市内の田んぼや川などでコウノトリを発見できる



## (1) 豊岡盆地は海だった

5000年から6000年前は温暖な気候のため現在よりも海面が高かったという。現在の海や川から離れた山沿いの地域から、貝塚や釣針などが発見されている。



縄文時代



現代

豊岡駅

出石

(出石古代学習館)



駄坂川原遺跡の釣針



→ 宮内黒田遺跡の弥生土器



→ 中谷貝塚

温暖化による縄文海進の後、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて緩やかな寒冷化したことによって海面が低下していく。この弥生海退により、入江だった豊岡盆地は陸地が変わっていく。

豊岡盆地は陸地になったが、人が住めない土地だった。川の勾配が非常に緩く、蛇行していた。また、河口付近で山に挟まれていたため、ボトルネックの地形が形成されていた。そのため洪水が何度も起こり、そのたびに浸水した地域から長期間水が引かず、泥海の状態が続いたという。

## (3) ところで

### 「アメノヒボコ伝説」はご存じですか？

～但馬に残る伝承～

新羅の王子アメノヒボコが妻を追って日本に渡り、播磨などの各地を回り、但馬の出石に移り住んだ。アメノヒボコは泥海の豊岡盆地を見て、瀬戸（円山川河口部）の大岩を取り除けば、水が海へ流れると考えた。大陸の技術や文化を伝え、協力して大岩を切り開くことに成功した。すると泥水が海へ流れ、人が住める土地が現れたという。



アメノヒボコ・瀬戸の岩引き図（所蔵：出石神社）



出石神社（豊岡市出石町）ではアメノヒボコを祭神として祭っている。神社の創立年代は明らかではないが、社伝によると約1300年前にはアメノヒボコの祭祀が行われていたという。

## (2) 現代の豊岡盆地は？

現在豊岡盆地を流れる円山川は、河川改修等により過去に比べて水害が発生しにくいように改良されたが



(国土地理院)

玄武洞や来日岳付近（河口付近）で**ボトルネックの地形**であること、河口から約10km上流でも**高低差が1mほど**しかないことから、現在も洪水が発生しやすい地形だといえる。

平成16年の台風23号をはじめ過去に大きな水害を受けた



台風23号による円山川の堤防決壊

洪水が発生した大雨はいくつも記録されているが、台風23号の大雨による円山川の水位と上昇速度は異例だった。



出石川の堤防決壊による住宅への被害



(国土地理院)



アメヒボコが動かした大岩は豊岡市瀬戸のこの場所にあったとされている



豊岡市瀬戸→



↑豊岡市瀬戸の河口部

## (4) コウノトリも住めるまち

泥海で人が住めなかった土地が**人もコウノトリも住める**まちに！

### ○コウノトリが豊岡を好んだのは

- ① ボトルネックの地形により水が海へ抜けにくいいため、湿地が形成された
- ② 湿地地形でコウノトリのエサとなるカエルや魚などが多く生息

### ○コウノトリと農業

- ① 農薬・化学肥料不使用
- ② 水管理による生きものを育む工夫

人 …… 安心安全な食べ物が食卓へ  
コウノトリ… 田んぼがエサの宝庫に



## (5) 豊岡盆地とアメヒボコ伝説

豊岡盆地の地形は、ときに大きな災害を引き起こす要因となり、多くの被害をもたらした事例もある。その一方で、水が海へ流れにくい地形だからこそ、多くの生き物を育む湿地が形成され、コウノトリの野生復帰に活用できた。農業で生き物を育み、生物多様性を保全する取り組みも始まった。その結果、今日ではコウノトリが豊岡に住む我々にとって非常に身近な存在となっている。

農業、観光、産業、文化、魅力的な自然景観など、今日の豊岡市を構成する要素が先人たちの発見や開発によってつくられてきた。「アメヒボコ伝説」が事実かどうかはさておき、瀬戸の大岩を動かしたアメヒボコも、豊岡盆地に住んでいた先人も、豊岡盆地が豊かになってほしいという思いを持っていたのかもしれない。その思いを豊岡に暮らす我々も継承し、今後も豊かな地域づくりを目指す。